

Dolls Front Line Nightmare Report

通りすぎる傭兵

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

S09B基地から転職することを決めた2体の戦術人形、WA2000とウエルロツドMk. II。

彼女達が新しい転職先を選んだのは、北米大陸での警察業務。

その赴任先の名を『ラクーンシティ』。

拙作のサブキャラ2人を主人公にしたスピノフチックな作品です。

ベースはゲーム版Re:バイオ2、3と映画版バイオ2をベースにして進行していきます。他にも拾える部分でアウトブレイクやオペラクなどのネタも拾っていくけると……いいなあ……

目次

Prologue 悪夢の始まり

1

Report I In the Ci

ty I 14

Report II In The Ci

ty II 22

Report III Raccoon P

olice Station 33

Report IV First Sur

vivor 46

Prologue 悪夢の始まり

「ダメね、エンジンがすっかり焼き付いてるわ」

「廃車よこしやがりましたか」

「ふざけるなつての！」

怒りに任せてボンネットを叩くように締め、車の中に戻る黒髪にパンツスーツの女性。警官服姿に金髪が似合いのもう一人は諦めたように帽子を被り直し、同様にして運転席に座りハンドルに身体を預けた。

「全く、ツイてませんねWA。ワルサー遅刻は確定です」

「おまけに電話網も発達してないときたから連絡もできないわ。技術が2000年台初頭とかレトロ口にも程があるでしょう！ 着いたらまずはこの車寄越したクソ野郎に1発入れないと気が済まないわ」

「まあまあ落ち着いてください。誰か通りかかるかもしれないじゃないですか」

「こんなところ日に一本も二本も来ないわよウエル！」

彼女らの目の前に広がるのは埃の被ったハイウェイ。昔からの交通に要所と言われているが、今となつては近道用の裏道程度にしか活用されなくらいだ。そんなところに通りがかかる車なんてのは、よほどのもの好きかよつぽど急ぎの用事がある人間だろう。

「あ、雨」

「……… さいつ悪。悪夢みたいな初出勤日ね」

「夢はいつか覚めますよ。初日はこつぴどく叱られるかもしれませんが、事情を話せばわかってくれます。2人で乗り切つていきましよう」

「アンドロイドのくせに天気予報も見られないつて罵倒されるのがオチよ」

ぼつりぼつりと降る雨は激しさを増し、瞬く間に土砂降りへと変わつてしまう。雨音が地面を叩きつける音とノイズばかりのラジオを聴きながら、WAはひとりごちた。

「暗い夜に大雨、届かない連絡に繋がらない電話、おまけにエンスト。まるでホラー映画の導入みたい。着いたらどうせシリアルキラーだとかフレディとかジエイソンがラウンシテイを闊歩してるのよ。鉄血の暴走アンドロイドでもターミネーターでもいいわよ」

「映画の見過ぎです。末期は随分と暇だったから映画漬けとは聞いてましたがこれ程で

すか」

「やることないんだもの、仕方ないじゃない」

「確かにそうでしたが……」

ぐでつ、とだらけるWA2000に眉を顰めるウエルロッドだったが、何か音を拾ったらしく顔を上げる。

「これはー」

「なに？ どうしたの？」

「車の音です！ 乗せてもらいましょー！」

「渡りに船、ますますホラー映画染みてきたわね」

車外に出て雨に濡れるのも厭わずおーいおーいと手を振るウエルロッド。彼女の耳は正しかったのか、すぐに車のヘッドライトが視界に飛び込んできた。

運転手も手を振る彼女に気がついたのか、古臭いカーキの軽トラックがエンストした車の路肩に寄せて止まった。ウエルロッドが運転席を覗き込めば、金髪の若い男がハンドルを握っている。ウエルロッドと同じ、警察の制服姿だ。

「どうしたんだ？ 女一人でこんなところになんて」

「実はエンジンが止まってしまつて…… 同じ警察官だとお見受けします。ラクーンシテイまで乗せていってもらえますか？」

「その制服、君も同じか？ 乗れよ。俺も丁度ラクーンシティに行くところだったんだ」
「ありがとうございます！ ああ、待つてください、連れが居るんです。WA！ 話が付きましたよ！ 乗せてくれるそうです！」

「五月蠅いわね。怒鳴らなくても聞こえてるわよ」

エンジンから煙を吐く車の後部座席から大きなハードケースを引っ張り出しながらボヤクWA。それをよこめに早々に助手席に乗り込んだウエルロッドは青年との会話に興じていた。

「彼女は同僚と言ったが、制服は？」

「堅苦しいのは嫌いと言っていました。それに胸のボタンを弾け飛ばしていたのでいつもの服ですよ」

「それは…… 災難、なのか？」

「近くで見ていると目福でしたよ。ところで同じラクーン市警の警官とお見受けしますが」

「ああ。レオン・S・ケネディ。今日から配属なんだ、よろしく」

「ウエルロッドと言います。同じく今日から配属です。私達はSTARS配属ですが、そちらは市警のようですね」

「STARS！ エリート集団じゃないか！ 凄いな！」

「とはいえ配属日から半日も遅刻しているようではエリートとは言えません。近いうちに市警に左遷されるやも」

「ははは、そんなことがあつたら歓迎するよ」

「ちよつと！ この車後部座席が無いじゃない！」

話が持ち上がっていたところに横槍が入る。土砂降りの中合羽をかぶつて雨を除けたはいいものの、レオンの乗ってきたトラックには後部座席の代わりに荷台がついていた。それに気がついたレオンが後ろを向き、

「ああすまない、キミもこちらに」

「もう！ こんな雨だつたら荷台があるだけで有難いってものよ、ずぶ濡れなのは変わらないんだから！」

「…… あ、ああ？ 大丈夫なのかい？」

「慣れてるわよ。前の職場じゃよくあることだったもの」

「キミは一体どんな職場にいたんだ……？」

「いけすかない野郎をぶちのめす職場よ…… 早く出してちょうだい。あつたかいコーヒーでも飲まないと風邪引くわよ」

「ああ、仰せのままに、お嬢様」



「ガソリンスタンドに寄ってもいいかな」

「大丈夫ですよ。遅刻に30分も1時間も変わりません」

「ワルサーもそれでいいかい？」

「暖かいものをちょうだい」

「わかった」

ラクーンシティまであと少しと言ったところで、小休止も兼ねてガソリンスタンドに寄ることを決めた一向。

こんな夜でもげんきに煌々と照明を灯すガソリンスタンドに車を止めて、車外に出てガソリンのノズルを差し込もうとしていたレオンは周囲の不気味さに思わず眩く。

OPENの筈なのに照明の落ちた、人気のないショップ。乗り捨てられたようで、まだエンジン音のするパトカー。

「気味が悪いな……」

「レオンさん、此方を」

「ウエルさん？　これは」

ウエルロッドが地面を指さすのと、店内からガラスが割れる音が響くのは同時だった。まだ黒ずんでいない鮮血は店内に続き、その店内からは不審な物音。

「行こう」

「ええ。何かよからぬことが起きている気がします」

「ちよつとー、私のコーヒーはー？」

ひとり状況を理解しないWA2000の発言など耳に入らず、2人は慎重に店へと歩を進めた。

「誰か？ いないか？」

「静かですね……」

落ちていたライトを拾い上げ、あたりを見渡すが人の姿はない。そのまま店の中を探索しようとしたレオンに、ウエルロッドが声を上げた。

「いつでも銃を抜ける用意を、嫌な予感がします」

「……わかった」

ライトを持つレオンの先導で店内の奥へ進むと、バックヤードの扉の前で首を抑える店員らしき男性が蹲っていた。傷口からは、尋常でないほどの血があふれている。

「大丈夫ですか!？」

傷が痛むのか顔を上げることはしなかったが、人が来たのがわかったのか。彼はバツ

クヤードを無言で指さす。

「中にいる、ということですね」

「ありがとうございます。外の同僚が救護してくれます、ここで動かないで。WA!

救急キツトを！」

「面倒ごととは嫌いだわ、まったく」

短い返事が返ってきたのを確認してから、2人はバックヤード内へ足を踏み入れる。非常用照明だけの薄暗い通路内は何かが暴れたようにものが散らばっている。

「強盗か？ 暴徒か？」

「熊とかだつたらいいんですけど」

無言で歩を進めた先、レオンの懐中電灯の光に人影が映る。

カーキに緑のワンポイント。ラクーン市警の軽装制服だ。警官と誰か、2人が揉み合っているように思える中、レオンが声をかける。

「大丈夫ですか、何かー」

「大丈夫だ、一般の人は下がってー」

此方が客だと勘違いした警官が振り向き、手で下がるような仕草を見せる。

それがいけなかったのか。

唸り声をあげ、警官が押さえ込んでいた人影が彼を押し倒す。

そして、彼の首筋に歯を突き立てた。

「なっ……」

「ぐあああああああつ！ た、助け」

みちみちとグロテスクな音をあげ首筋の肉を引きちぎり、警官が絶命する。口元を赤く染め、肉片を咀嚼しながら人影が力無くゆらりと立ち上がる。

明らかに正気のない、白く濁った目。乾いた皮膚。青白い肌に浮浪者のように汚れた服。

明らかに常人ではない。

「生まれ！ 止まらないと……！！」

「っ！」

そうレオンが警告する前に、ウエルロッドが引き金を引く。

隠密ように仕立てられた彼女の愛銃からは音の抑えられた短い発射音がし、人影の頭に銃弾の穴が開く。その人影はゆらりと糸が切れた人形のように倒れ伏した。

「おい君！ 警告もなしにそんな」

「あれがまともな人間のやることですが！ 早く外に出て本部に報告しましょう！」

「…… そうだな」

「ちよつと！ あんたどういうつもり！」

「WAの声です、急がないと！」

「わかってる」

元来たバックヤードの入り口はどうか閉まっていた。なのでもう一つの出口の鍵を開け、店内に戻る。

その目の前には、失血死してるほどの血溜まりと、青白い肌でありながらも立ち上がる先程の店員。

野獣のような唸り声をあげ、此方へと幽鬼のように手を伸ばそうとするのをレオンが撃ち怯ませたところを通り抜け、商品棚を倒して現れた男は無視して外へ。

ドアを開けようとしたところで、レザージャケットを着た女性が扉を開けて拳銃を構えるこちらに声を張り上げた。

「やめて撃たないで！」

「しゃがめ！」

「邪魔よ！」

女性がちやがむと同時にレオンが彼女の背後にいた人影のを撃ち抜き、よろけた所にWA2000の蹴りが炸裂し頭を砕いた。

妙に少ない返り血を気に留めることもなくWA2000がレオンに声を張り上げる。

「どうなってるのよこれは！」

「こつちが知りたいですよ。とにかくラクーンシティまで急ぐべきかと。もしかすると、街の方にも」

「大丈夫か？」

「ええ、なんとかね。それでー」

女性が無かを言いかけたところで、後ろで閉めた店の扉に口を血まみれにしたい男性がぶつかり唸り声をあげ、前方の照明の影から何人もの人影が姿を表す。

全員一様に口元が赤く染まり、死人のよう。

「とにかく逃げるわよー」

WA2000の掛け声に弾かれるように、全員が1番近い車両である乗り捨てたパトカーに殺到した。

襲ってくる人らしきものを押しつけ、蹴り倒して道を作る。

運転席と助手席にはレオンと女性、後部座席にウエルロッドとWA2000がそれぞれ乗り込んで、レオンがアクセルを目一杯踏み込みガソリンスタンドから逃げ出した。

「……君の名前は？ どうしてこんなところに」

「クレア。クレア・レッドフィールド。警官の兄を探しに来たの、ここにいて」

「そうなのか。とにかく無事でよかった。ボクの名前はレオン。このままだとどうなる

かー」

「あーっ！っ！」

「どうした」

後部座席のWA2000が突然声を張り上げ、思わずレオンまでもが振り返る。

その当の本人はというと頭を抱え小さな声で呟いた。

「銃を車に置きっぱなしにした」

「お気に入りだったのか？」

「それどころじゃないわよ！ アレじゃないと私は調子が出ないってのに、しかもガンスミスにチューンしてもらった一点物の……」

「気持ちわかるけど銃を選ばないのが一流ってクリスは言ってたわよ」

「違うわよ！ そうじゃなくて、ああもう！」

「まあまあ、銃器店のひとつや二つあるでしょうし」

「アレが置いてあるわけ無いじゃない！」

「…………… とりあえず、これを使え。あの警官の予備の銃だと思おうが」

「ふざけるんじゃないわよ！ 38口径のリボルバーなんて私はスナイパーなのにこんな安物で満足しろってこと！」

「わがままお嬢様だなキミの相棒は！」

「…… コーヒーが飲めないといつもこうなんです」

「それは立派なカフェイン中毒者だな」

「前の職場のコーヒーが美味しいのが悪いのよ！」

本来ならばもう少し静かだったはずの道行は騒がしく、姦しい。果たしてこれは悪夢を切り払う希望となるか、新たな絶望を運ぶきっかけなのか。

それはまだ、誰も知らない。

Report—1 In the City 1

「ねえ貴女、どうして警官になろうと思ったの？ そんなに若いのに。まだ子供じゃない」

「私ですか？」

ラクーン市内に向かう車中、クレアは徐に振り向き、ウエルロッドに声をかけ「もう片方が銃を置いてきぼりにしカフエインの中毒症状で苛立つWA2000しかないなので当然とも言えるのだが——そんな質問をした。

「見てくれはハイティーンですが、勘違いはしないでください。これでも立派な成人ですし、働いていたこともありませう」

「へえ、どんなことをしていたの？」

「カフエの店員だとか、ラジオ局のお手伝いだとか…… 傭兵稼業の人と関わりを持つこともありました」

「便利屋みたいなことでもしていたってわけ？」

「んー、まあ、そんなところですかね。詳しくは守秘義務もあるので控えさせてもらえる

と」

「守秘義務」

「誰しも言いたくない過去はありますので。例えばまあ、深い方デーパープなの風俗とか。私はやってませんよ？ 同僚にんな経歴の持ち主がいました」

「私じゃないわよ」

WA2000の不機嫌な態度をいつもの事だと聞き流しながら、ウエルロッドは言葉が続けた。

「と、まあ。今度はこちら側の質問のターンですかね。」

身綺麗ですし見たところ大学生。安全圏から…… 開拓が進む片田舎の街に、そんな

な貴女こそ、何のようですか」

彼女は少し黙ると、ポケットから写真を取り出す。

そこに写っているのは痩身の男性や妙齢の女性、ガッチリした体の男性と、今より少しだけ若く見える彼女の姿。

彼女はこちらに笑顔を向ける、かなりガタイの良いがっちりとした肉体の男性を指さして、

「貴女達、STARSに所属する、て言っていたっけ？ なら、彼の顔に見覚えは？」

「ん、いえ、ありませんね」

「そう……直近の作戦については？」

「守秘義務もありますので民間人には。少なくとも私は知りませんが」

「クリス。クリス・レッドフィールドね」

「知っているの?!」

「書類と名前は」

億劫だと言わんばかりの態度で窓際に頬杖をつきながら、ではあるがWA2000は自分の知ることを語る。

「彼はSTARSの中でもとびきり優秀な人材の1人。α、β、☒と分隊番号が振られるけど、彼は確かβだったわね。番号が若ければ若いほど優秀つものだし、まして選りすぐりの特殊部隊。相当できるわ。」

「私たちに目をつけたのも彼よ。しらなかつたの？」

「どこからそんな情報抜いてきたんです？ クラッキングですか？」

「正規ルートよ！ 全く、就職先の情報くらい調べなさいよ」

「こっちは戦後処理担当だったんですよ！」

「ならしやうがないわね、それで？ 兄がどうしたの？」

「半年前から連絡が取れなくて。電話してもわからないの一点張りだから自分で調べに来たってわけ」

「行動力だけは褒めてあげたいわね。それに特殊部隊なんて連絡不通なんて日常茶飯事よ？」 たかが半年くらいは作戦行動で騒ぐ事でもないでしょう」

「WA。普通の街で特殊部隊は編成されませんし、もう戦争は終わつたんですよ？」

「…… そう、そうなのよ。おかしいのよ、この街は」

雨の勢いがおさまりつつある外の風景。一瞬だけ流れるラクーンシティまであと3kmの標識の下には、傘をモチーフにした製薬会社の名前が刻まれている。

「戦争という名の鉄血の反乱も、崩壊液のゴタゴタも片付いて1年は経つ。戦後復興が盛んとは言えここは交通的にも経済的にも要所とは言えない。そんな街に特殊部隊なんて配備されるのは釣り合わない」

「不安だからって予算を多く下ろしただけじゃないか？ この街の周囲は治安は良くないって聞いている」

「多すぎるのよ」

WA2000の言葉は、車内によく響いた。

「多すぎる……？」

「全自動ライフルにショットガンとスラグ弾と散弾をたつぷり。少数配備とは言えグレネードランチャーは殺傷用の炸裂弾に對生物用硫酸弾。拳銃は特注のカスタム品に、十分な防弾装備と軽装甲車両まで。どうして警察署に物資がこんなに集まるのよおかし

いでしよう」

「市長が数年前に設立したって話だろ？ その時はまだ戦争も続いてたんだからそれくらいあつて然るべきだろ」

「じゃあなんで選抜警官の特殊部隊S W A Tも別であるのよ？ それに独立した指揮系統？ 入隊試験に私はテロリズム思想の持ち主ですって書いてあつてもおかしくないわよ」

「そんな事ない！ クリスはそんなことしないわ！」

「わかつてるわよ。でも、そう見えるだけって話。」

それにシティと協力体制にある製薬会社アンブレラ社もきな臭いわ。いち薬事企業がどうして制圧用の私設軍隊作ってんのよ、私は後ろめたい事をしていきますって言っているようにしか思えないのだけれど」

「不審な点が多いが、万が一に備えてるだけだろ」

「本当にそうなのかしら……？」

レオンの一言で片付けててしまつてはいい事ではないのだがこのままではゴシップ誌が語るただの陰謀論に過ぎない。確たる証拠がない以上その理由を判明させることは難しい。

「取り越し苦労だといいのだけど」

「見えたぞ、ラクーンシティだ」

WA2000のつぶやきに被せるようなレオンの発言。各々が顔を上げ、車内の空気が張り詰める。

ラクーンシティの夜は、重く暗く。

◇◇◇

「酷い有様だ」

「ええ、まるで暴動の跡みたい」

道路に散乱するバリケードの跡。操作を誤ったか乗り捨てられた車の列。あちこちで途切れた照明と、反比例するように燃え盛る建築物。

「…… まいったな。ここからは歩こう」

警官隊と市民が協力して作ったのか、車や鉄柵、家具で作られたバリケードで道が塞がれていたため、車でこれ以上先へ進む事はできない。

「警察署まではすぐです。だからこそこのようなバリケードができたのかと」

「もしかしたら生存者も」

「ええ、期待できません」

「っ！ レオン。早く降りた方が良さそうよ」

「早く、それは一体？」

「みればわかるわ……」

WA2000が指し示した方先にあつたのは。

倒れ伏した民間人にまたがる二つの影。燃える車の光に照らされたそれは、暗い街中によく映えた。獣のような四足でまたがり、二チ二チと粘着質な音を立てて人肉を嘔みちぎる。

こちらの気配に気が付いたか、ゆっくりと振り向き、口元からだらしなく涎と血液を滴らせ腐つて濁つた目をこちらに向ける姿は。

「ここはもう、奴らの領域テリトリーつて訳ね」

「そういう事。死にたくなかつたら即断即け」

「うああああああ……」

「ひっ!?!」

後部座席の扉を開けようとしたWA2000の目の前にソレが纏わりつく。もとい、こちらの肉を喰らわんと手を伸ばしてくる。それは車の周囲全てで起こつた。ベタバタと窓という窓、扉という扉にまとわりつき、生きた人間を貪り喰らわんと渴き腐つた手を伸ばし、頭を叩きつける。

「出られない!」

「()の()」

「ヤバイわよ！ このままじゃ！」

「つー……タンクローリーが来ます！ このままじゃバリケードに挟まれてサンドイッチになりますよ！」

「ベークンになるのは勘弁被る！」

「レオン早く車をだして！」

「だめだ！ 何かが挟まってる！」

「ああもう、最悪っ。無茶を通すわよ！」

リアガラスを叩き割り、先程貰い受けたリボルバーを構えるWA2000。血塗れの腕が視界を遮る中、彼女の双眼は目標を捉えて離さない。

「……………」

銃弾はトラックの右タイヤだけを正確に射抜きパンクさせ、足元が狂った車体が揺らぐ。

「みんな捕まって！ 弾き飛ばされるわよ！」

Report—2 In The City II

「あいたたた……」

全身を苛む鈍い痛みにうめきつつ、あたりを警戒する。途切れていた意識がハッキリとしてくるにつれて周囲の状況が分かり始めたと同時に、何が起きたかをWA2000は思い出した。

バランスを崩したタンクローリーとパトカーが派手にぶつかった結果コマのようにパトカー側は弾け飛び、WA2000は自分で叩き割ったリアガラスから車外に放り出された。そのままタンクローリーも転倒、地面を擦ったか配線がショートしたかで散った火花に運んでいた燃料が引火し、目の前の地獄を作り出していた。

乗ってきたパトカーは引火したらしくキャンプファイアーのように燃え盛り、中に人間がいるとすればこんがり焼けてしまっていることだろう。

彼女は変わらなく痛む頭に手を当てぬるりとした感触が返ってきたことに悪態を内

心で吐きつつ、声を張り上げる。幸い燃料が広範囲に飛び散っているおかげで人影は寄ってこれないはずだ。

「ウエル！ レオン！ クレア！ くたばって無いようなら返事なさい！」

「そんなに大声出さなくても聞こえてるさ……… つつ」

WA2000が振り向けばすぐ後ろの車に身体を預けていたレオンが立ち上がる姿がみえた。五体満足であるがどこかを痛めたのかその足元は少しだけ頼りない。彼はWA2000の姿を認めるとニヒルな笑いを浮かべたが、彼女は皮肉っぽい口調でそれに答える。

「元氣そうでよかった」

「そう見えるか？」

「死んでなきやどれも同じよ。ウエルどこにいるの！」

相棒のウエルロッドに呼びかけようとするが、ノイズが走る鋭い痛みは破片で切った物による痛みだけでは無い。

「肝心な時に」

「クレアー！ 無事かー！」

「ええ、なんとか。警察署で落ち合いましたよ！」

燃え盛るパトカーの向こう側に必死に呼びかけるレオン。クレアから返事は帰って

くるが、ウエルロッドからの返答はない。

「ウエルロッドはいないの!？」

「見当たらないわ！」

「いこう。モタモタしてると囲まれる」

「ウエルが、ウエルロッドがいない」

「……行こう」

「置いて行けつて言うの！ 私の相棒なのよ！ こんなところであいつが死ぬなんてありえな」

「ワルサー！」

捲し立てようとしたWA2000を、レオンの鋭い一言が押しとどめた。顔は彼女から見えないが、彼はハンドガンのグリップを壊れるくらいに握りしめていた。それは自分も同じだというように、置いていくなんて決断をしたくはないと言わんばかりに。

だが、WA2000もレオンも理性ではわかつている。この場に居続けることは、自分があの路肩の死体になりたいのと同じだ。お互いに、ここで死ぬのはごめんだ。

「行こう」

「……わかったわ。地図は頭の中に入ってる、裏口からなるから少しだけ遠回りになるわよ。だけど」

「なんだ？」

「市街地を通りぬけることになるわ、それに歓楽街も」

無言で積まれたバリケードの山と、それに衝突し炎上する車列を指し示すWA2000。

恐らく大通りはバリケードで通れないしアレも殺到している、なら細い通路を通ってバリケードの穴を抜けていくしかない。問題があるとすればその道は市街地のど真ん中で、さらにシヨップの集中する歓楽街に面しているということだ。

彼女はいつもの愛銃より数倍は頼りない小さなリボルバーを抜き、シリンダーの中に弾が入っているかを確認する。

「銃を用意して。何人も殺すことになるわ」

「市民を守る銃が、市民を殺すことになるとはね」

レオンがそう愚痴るが、互いに泣き言は言ってられない。WA2000はそこら辺に転がっている内臓や肉が欠けている警官の死体から銃を拾い上げ、マガジンごと9パラを借り受けウェストポーチに放り込む。さっきは散々恨み言を漏らしたが、マガジンを必要としないのは役に立つ時がある。

「ブローニングHPハイパワー、にレミントン。壊れてなかったら使ったのに」

「泣き言言っても仕方ないさ」

「なによそつちはVP70なんて失敗作使ってるくせに」

「店主に押し付けられたんだ、新発売だって。とんだ詐欺だった」

「馬鹿なの？」

「……泣けるぜ」



「……感想は？」

「最悪だな。ウジャウジャという」

「でしようね。登れる？」

「大丈夫さ」

それからしばらく。うめき声と炎の爆ぜる音、そしてどこからか聞こえる生存者らしきまともな悲鳴に耳を塞ぎ、肉が焼けるような腐るような悪臭に鼻をつまみながら先へ進んだ。

基本的に道はゾンビーEIID感染者と違って身体は柔らかいけれど外見は同じような物—ーによって塞がれている。此処を通ろうとするのは自殺行為だ。

なら、それ以外の道を通るしかない。そう判断したレオンはWA2000の提案でそ

の道沿い、隣接する建物の屋上やバルコニーを利用して先に進むことにした。

シヨップの屋根から飛び移った先、煉瓦造りのアパートメント窓を叩き割り足を踏み入れる。

厚底のブーツがガラスを踏み割る音だけが響く屋内、整頓されたりビングらしい場所から何か音のする寝室へゆっくりと足を踏み入れようとして。

私は無言でレオンを制し、寝室の扉を閉めた。

「行きましよう」

「…… 生存者は」

「いないわ」

私は無言で近くの家具をドアの前に動かし、その場を後にした。それはこの中にいる人物がどうなっているか、レオンにもわかるはずだから。

「君はすごいな、僕はついていくだけで精一杯だ」

「口説いてるつもり？」

「まさか」

おどけて見せるレオンは私のことを励ましてくれているのか、オーバーなりアクションをして見せた。そんな事しなくても気落ちなんてしてないわよもう。

あるとすればこの状況を打破できる解決策が警察署にあるかということと、私の任務

を達成できるかどうかだけ。この新米警官には悪いけれど利用させてもらいたいところね。

ゾンビが闊歩するバスケットコートを飛び越え、窓から飛び出すゾンビを蹴落とし、先へすすむ。

しばらくすると、他の建物とは異彩を放つ建築物が見えてきた。

「見えたわ」

「ああ、一度来たから覚えてるよ。裏口はあっちだ」

「頼りになるわね」

アパートメントのバルコニーから極力音を立てないように地面に降り、鉄柵と扉で施錠された裏口にたどり着いた。しかし扉には古めかしい南京錠がかけられている。周りに例のゾンビがいないことを確認し、錠穴を覗き込んだ。

「…… 30秒頂戴」

「できるのか?」

「当然」

腰のポケットからピッキングツールを取り出してみせる。ハッキングツールピッキングツールの2種があり、電子ロックも物理ロックもこれさえあれば突破できる頼れる相棒。こんな古臭い錠なんかほら……… 一瞬で。

「……」

私は鍵の中で折れてしまったピッキングツールを外して投げ捨て、無言で銃を抜き南
京錠と扉を繋ぐ溶接部を撃ち抜いた。

「開いたわ。行きましょう」

「おい」

警戒していたのか、少しだけ遠くからする声を無視して私は鉄柵の扉を押し開く。

綺麗に生えそろった生垣と、時代を感じる石畳の並び。そして荘厳さを感じさせる大
理石でできた外観。それらは照明と炎の仄かな光に照らされ、自分の存在感をハッキリ
と示していた。

「元々は美術館だった、てのも納得ね。それに」

開けた裏庭に数は少なくとも、いる。頑丈な鉄柵なのも知らずに頭を叩きつけ、生肉
を求めて手をのばす哀れな怪物がうじゃうじゃと群がる姿もあった。

「……避難所には、もってこいだったのかもね」

「行こう。生存者はきつという」

レオンの案内の元、私は裏口から警察署へ足を踏み入れた。



「派手に、吹き飛ばされましたね」

口の中に溜まった鉄臭い液体を吐き出し、全身が痛みで悲鳴をあげているのを無視しながらウエルロッドは立ち上がった。見渡す限り焔に包まれ状況が把握はできないが、お陰で哀れな被害者は寄つては来れなかつたらしい。

「さて……」

胸元の無線機を漁ろうとして、ウエルロッドが探り当てたのは何故かWA2000が住んでいる家ののテレビリモコンだった。

『早く行きますよ！ 道が混んでるんですから！』

『予定より2時間は早いとかどういふことよ…… って制服がー！』

『もういつもので良いじゃないですか羨ましい胸ですわね！』

『好きで大きいわけじゃないのよ！』

たしかそう。渋滞で道が混んでいるからとWA2000の家に押しかけ彼女を急かし、机の上に置いてあつた無線を掴んで胸ポケットに入れた、その筈だった。

「うっかりにも程があるでしょう」

経験を積みめば積むほどそれ以外が疎かになるというのは本当らしい。昔のちんちくりんボデイな上司が訓練資料とラジオ原稿を間違えた時に笑っていたが、まさか自分も

同じことをやらかすとは。

役に立たないリモコンだが無くしたら無くしたで持ち主に怒らせそうになるのでしつかりと胸元にしまい、脳内に地図を思い浮かべる。

警察署は東、その裏口は北側の路地ルートが近い。しかし両方のルートはバリケードと焔で塞がれている。

その他のルートで警察署に一番近いのは、

「地下鉄を通るルートですな」

ラクーンシティの地下をぐるつと一周する様に通る地下鉄。主要機関を線路で繋ぐそれはおそらく地上より障害は多くはない。

「地下鉄が運行してるハズは無いですが広い地下通路を使うのは悪くないアイデアです」

もしかしたら生きている民間人も合流が可能、そう呟きつつ彼女は炎の切れ目を縫って最寄りの地下鉄駅へと走った。

Report — 3 Raccoon Police Station

薄暗い中庭には真新しい掘り返された後が無数にあり、そのほぼ全てに十字に組まれた鉄パイプが刺さっていた。

掘りかけの穴の周りには破れた遺体袋や、運搬に使われたであろう運搬車、スコップなどが散乱している。

簡素な十字架の下に何が埋まっているのは言うまでもないことだろう。何故そのいくつかが、中から掘り返された様に穴が開いていることも。

「ひどい有様ね」

「……急ごう」

土砂降りの中ではあるが、死者を悼むことすら許されてはくれない。ここは、そんな地獄だ。レオン達がしばらく進むと下りる階段があり、その階下を覗き込んだ先には扉の近くで蹲る人影と黒い扉を見つけた。

「……死んでるわ」

「ああ、わかってる」

人影は、かろうじて人だったということしかわからない。顔の肉を食い荒らされ、首の肉を千切られ、腕の肉も腹の肉も欠けている。普段であれば正視すらままならないであろう姿だが、彼が何故扉の前で死んでいるのかはわかる。

「外から鍵を閉めたってわけね」

「チェーンカッターを探そう」

WA2000が彼を退かせば、そこにはチェーンと南京錠で鍵がかけられていた。鍵穴は壊れたのか、新しくチェーンを通せる様溶接加工を施してある。本来ならば応急処置なのだろうが、間に合わなかったらしい。

だからこの扉は外からしか鍵をかけられない。つまり誰かが外に出てこの鍵を掛ける必要があった。

彼の血で黒く染まった制服を見ながら、WA2000はひとりごちる。

「自己犠牲なんて馬鹿馬鹿しい。けど、それで誰かを救えたと思うなら、それは救いになるのかしら」

ゾンビによって踏み荒らされ泥と水と血に汚れた帽子を拾い上げ軽く汚れを払い、彼の頭の上へ乗せた。

「頼りない後輩が来てあげたわ。これで誰かを助けられたら、それはきつと、救いになるはずよね」

「あつたぞー！」

レオンが持つてきたチェーンカッターは問題なく鎖を断ち切り、扉を開く。銃を構えたWA2000は死体を一瞥してから、屋内へと足を踏み入れた。

室内の電気が通っていないのか廊下は薄暗い。目に入るところにゾンビはいないと「敵影なし」のハンドサインを送るWA2000だったが、

「なにしてるんだ？」

「ゾンビは見当たらないけれど、警戒はして」

WA2000は新米警官には伝わるわけないかと姿勢を崩し小声で用件を伝え、レオンはそれに対し銃を下ろすことで応えた。

「あとバリケードを積んでおきましょう」

「自分から退路を断つのは不味くないか？」

「私たちが入ってきたところから入ってくる方が不味いわよ。出口なんてどうでもなるわ」

「そうだと良いが」

「いいから手伝いなさい」

手近な掃除具のロッカーや書類棚を2人がかりで持ち上げ、入ってきたドアの前に積み上げる。知能なく体当たりを繰り返すだけのゾンビ程度なら、これだけで十分だろう。

「にしても、酷いな」

「何か？」

「肉が腐った匂いと、血の匂いだ。鼻がおかしくなったのか？」

「意図的に無視してたのに思い出させないでよ」

レオンが言う通り、警察署の内部は通例通りのかび臭さとは違う死臭を放っていた。足元の血と食い散らされた肉片から見るに、怪物の侵入を許してしまったことだろう。それも数日かは前の話だ。

WA2000は近くの壁にもたれかかり死んでいる警官の死体の手をおもむろに取る。

雨を浴びて冷えきっているはずの彼女の身体より冷たい、冷たい死体。死後硬直は既に溶け、血溜まりは乾いている。傷口はどす黒く変色し、一部は腐った様にブヨブヨとした手触りを彼女の手に伝えてきた。

「死後2、3日ってところね。にしては腐りすぎだとは思うけれど」

「おい！ 危ないぞ」

「これだけやって起き上がらないならもう大丈夫でしょう。なんでもいいから情報が欲しいの」

「死体検分つてヤツか？ 食われても助けられないぞ」

「知ってるわよ」

WA2000は死体の顔を見ようと、帽子で隠れる彼の顔を持ち上げた。

それを彼女は後悔することになる。

ぐしゃ、と肉片が落ちる音が廊下に響く。

「最っ悪」

彼女の目の前にあったのは、口元から首にかけて鋭く切り裂かれた傷口だ。先程の音は持ち上げたことよって腱が切れ顎が地面に落ちた音。そして彼女の制服、そのお腹の部分にべったりと血と腐った肉片がついた音でもある。

「ねえ」

「なんだ？」

「これ、どう思うっ？」

レオンを呼び寄せ、腐臭に鼻を摘みつつも死体の傷口を見せる。彼も同じ様に腐臭と凄惨な傷口に顔を顰めてはだが答えた。

「酷いな」

「ええ、ナイフか斧か、鋭利な何かで切り裂かれたみたいね」

「人がやったってか？」

「怪物が振り回した方が説得力があるわ。骨まで切れている以上、このパワーは人じゃない。何かいるわよ、この廊下には」

2人とも暗い廊下の奥を見た。

雷鳴に照らされ臙げに影が映る外廊下。ゾンビが窓のバリケードの窓から手を突き出すその奥には、何かがいる。

「音を立てずに、無用な発砲は厳禁よ」

「ちよつと待て。これは、ノイズか？」

「だとしたら」

ジジジ、と何かを擦るような特有の音。これが自分の聞き間違いでないことをレオンの反応から察したWA2000は手近の無線機、つまりは目の前の死体の警官であれば持っているであろうソレを探した。ウエストポーチ付近に手を伸ばしたところで、硬質な何かに行き着く。WA2000は手の感触からそれを決めつけ、応答スイッチらしいところを押し込みながら引つ張り出した。

『こち……ブラ……補、誰か………が』

「誰かいるんだ！」

「朗報ね。生存者がいるってこと」

砂塵まじりではあるが、声がする。ちょうどレオンよりかは一回りくらい年上の成人男性の声。つまりは生存者の存在の確定に、ふたりの心が躍った。

「こちらレオン・S・ケネディ、聞こえますか？」

『そ……、新入りか。よか…… た、メイ…… ルだ。ごう……』

「メインホールなら分かります。そこで合流しましょう」

『助か……、死……よ』

そこで無線は途切れた。顔を上げたレオンは、銃を構え直す。その顔は心なしか嬉しそうに柔らかくなっていた。

それをWA2000は厳しい声で咎める。

「気を抜かないで、死にたくないのなら」

「わかっているさ。でも、生存者がいるってだけで」

「気持ちわかるわよ、でも忘れないで」

WA2000は厳しい声で、悔しそうに続ける。

「生存者だとしても、一緒に脱出できるわけじゃないのよ？」

「おいおい民間人を助けるのが警官の務めつてもんだらう？」

「瀕死の人間を救う理由なんて持ってないわ」

続けた答えが意外だったのか押し黙るレオン。膝の汚れを払い立ち上がった彼女はレオンを見下ろして続けた。

「生存者が全員五体満足なはずがない。もし怪我をしているのなら、もし、ゾンビになるようなことがあれば。」

私は切り捨てて先に進む。貴方には、その覚悟がある？」

「俺は……。」

その先の言葉は出なかった。

果たして俺は撃つ事ができるのか。見ず知らずの他人の死体ではなく、今の今まで生きていた人間のなれはてを。殺人とさしてかわらないような行為を、許容する勇気があるのか。自問自答してもまだ答えは出ない。

WA2000は言い淀む彼に背を向け、先に歩き出す。

覚悟がないのなら、自分がそれを持ってばいい。そう胸に決め、リボルバーのグリップを一段と強く握りしめた。

「これだから人間ってのは……。」

漏らした言葉はレオンへの失望か、それとも別の感情か。

それは、彼女自身にもわからない。



「メインホールに行くにはこのオフィスを抜けなくちゃならない」

「冗談きついでしょ。？」

暗がりの中、懐中電灯の光に照らされる血塗れの案内図を見てWA2000は舌打ちをせざるを得なかった。

「避難民を受けいられれそんな空き会議室があるルートを通つて？ よりにもよつて最後には警官の休憩所、そしてまたオフィス？ 何体いると思つてんのよ」

「他のルートは上の階を回つていくしかない。でも鍵がかかつてるんだ、この道しかない」

「最悪。で、妙案か何かはあるのかしら？」

「こいつを使おう」

通路の警官の腰から拝借してきたフラッシュバンを見せるレオン。本来なら特殊部隊が使うような強烈な光と音を発する兵器は、どういう訳か多くの警官が持っていた。

おそらくSTARSの兵装なのだろうがそれに対してますますWA2000としては過剰な武力に対し疑念を深めるほかはない。とはいえ、今の状況は猫の手も借りたいほど。いちいち使う武器に文句を付けないのがプロフェッショナルだ、とWA2000

はピンを抜く。

磨りガラス越しではあるが何人もの人影が歩くオフィス。一枚扉を開ければ、その音で何体かはこちらに気がつくだろう。あいつらは変に耳が敏いのだというのは、今までの経験からわかっていることだ。

「耳と目を塞いで走り抜けるわよ。最悪、こんな単純な手しか取れないだなんて」

「派手に撃ち合いするよりはマシだろう？」

「いえてる」

3カウント。WA2000は無言で指を立て、レオンはそれに応えるように扉に手をかける。

「3、2……今」

「行くぞっ」

レオンが扉を開け放つと同時にコンパクトな下手投げで閃光手榴弾を投げる。それはちようど部屋の中央にゆっくりと到達し、炸裂した。

「Go!Go!」

WA2000の声に背中を押されるように飛び出したレオンは開け放ったドアに滑り込むように身体を捻じ込み、目を抑えて唸るゾンビを押し除け道を作る。その背中にピツタリと張り付きながら、こちらに向かつてきそうなゾンビには銃弾を的確に叩き

込むWA2000。

「2つ目、早く!」

「開けて!」

レオンが廊下の扉に取りついた瞬間には、WA2000は閃光手榴弾を振りかぶって
いた。

光に照らされて浮かび上がるのは、災害の後のようにメチャクチャになった廊下とヌ
ルヌルとした何かで濡れた石の廊下。そして、人影がたくさん。

「クソ、棚が倒れて道が」

「だったら退ければいいでしょう?!」

乱暴に葉莖を振り落とし、使い終わったクイックローダーを投げ捨てながら罵声を浴
びせるWA2000に対しレオンは苦い顔をしながらもスチールラックに取り付き、踏
ん張る。

「いけ、そうだ!」

「これでもくらつときなさい!」

レオンが棚を退かしたのを見計らって、リボルバーでゾンビではなく側の消火器を撃
ち抜く。内封された炭酸ガスと消化剤が舞い上がり煙幕を作っているうちに彼女も棚
の隙間を強引に通り返した。

「最後だっ！」

「言われなくても」

そして最後、こじんまりとした室内に手榴弾を投げ込み、その中へ身を躍らせる。

この角を曲がればメインホール、というところでレオンは障害に当たってしまった。

希望を塞ぐように立ち塞がる、鈍色のシャツター。

「防火シャツターだっ!? ここまできて！」

「こじ開けるわよ、ここが終わりなんて認めない！」

下部の僅かな隙間に指をかけ暗闇の中でもお互いに息を合わせて力を込める。最初はピクリとも動かないそれが、ジリジリと持ち上がってゆく。

数センチの隙間が人がかろうじて通れるくらいの幅になったところでレオンがWA 2000を急かした。

「君が先だ、行け！」

泥まみれ血塗れの床で匍匐前進なんて誰もやりたくは無いだろが、この事態に文句は言わない。

「抜け、た！ レオンも早く！ 追いつかれる！」

「わかってるさ！」

WA 2000が支え役を交代し、レオンもまたうつ伏せになって素早く通り抜けよう

とする。しかし後は足だけとなったところで、聞きたくなかった呻き声とレオンの焦る声が響く。

「この、離れろっ!?!」

「早く……! ! 長くは持たないわよ……! !」

レオンの足にまとわりつき迫る腐乱死体、その口が脇腹を噛みちぎらんと伸びて……

「捕まれ、もう大丈夫だぞ!」

誰かがレオンの首元を掴み、ホール側へと引っ張り出す。そしてWA2000の肩に手を置き、ゾンビの頭を踏み潰した。

「立てるか、新入り」

その誰か——黒人警官は手を差し伸べ、皮肉っぽくではあるが新人に対し歓迎の挨拶を告げた。

「ようこそ、ラクーン市警へ」

Report—4 First Survivor

「よう、新入り。それと、市民か？」

「こんなナリだけどSTARSよ、今日からね」

「そうか。ともかく、無事でよかった。マーヴィン。マーヴィン・ブラナー警部補だ」

「ありがとうございます。僕はレオン・スコット・ケネディ、彼女は」

「ワルサー。そう呼んで」

「こちらこそよろしく」

レオン達に手を差し伸べた黒人警官はそう名乗り、待合室から引つ張り出されてきたであろうソファーに横たわる。先ほどから抑えているが、脇腹から流れる血はかなりのものであることをWA2000は見逃していなかった。

「こうなった原因は？」

「さあな。わかってることといえば、気を抜いた途端アイツらの仲間入りをするって事

ただだ」

「先週から出勤かと思えば待機命令が出て。もう少し早くきていけば……」

「今いるだけで十分だ新入り。ともかく、ここから出る方法を探さないと。コイツを見ろ」

血で汚れたメモ帳を見せるマーヴィン。そこにはこの警察署の簡単な見取り図と、隣接する地下駐車場を繋ぐ道が推測を交えて記載されていた。

「コレは？」

「俺の同僚が探してた隠し通路だ。なんでも、ここは昔は美術館でな、有事の時にモノを持ち出せるような秘密通路があったらしい」

「古い施設には良くある話ね」

「ああ、与太話を真に受ける日が来るとはな」

「ほかに生存者はいないのか？」

「民間人は逃した、生きてるといいが」

「その脱出方法はもう使えないの？」

「STARSの装甲車を持ってきて正面玄関から強行突破した。今は車もないしゾンビも多すぎてる」

「……残った理由は？」

「まだ誰かが助けを求めているなら、応えるのが警官の仕事だ。それにこのザマだ。足手纏いにはなりたくない」

そう言つて脇腹の傷をレオンに見せる。無線や防弾チョッキを装備していたレオンが慌ててマーヴィンに詰め寄つた。

「今すぐ病院にいきましょう！」

「いい、俺のことは気にするな」

「ですが」

「いいから！」

声を荒げるマーヴィンに驚くレオン。それに構わずマーヴィンは自分の腰から抜いたサバイバルナイフをレオンの手に握らせる。

「コレは命令だ。お前は自分の身を守れ。俺の二の舞にはなるなよ」

「……」

「もし奴らを見つけても、迷うな。それが警官であれ誰であれ、躊躇うなよ。殺すか、逃げるか、だ」

「……はい」

「すまないな新入り共。ろくに歓迎パーティーもしてやれない。プレゼントも用意してたんだが、渡しそびれたな」

「気持ちだけで充分よ。それに」

WA2000は机の上に置いてあるマーヴィンのものであるうブローニングを一瞥する。レオンの角度からはちょうど見えないが、マガジンの入っていないガラクタ同然のソレを。

「いいのね？」

「ああ。それと良いことを教えてやる。2階の東に武器庫があるから、運が良ければ武器が残ってるかもしれない」

「あなたの分は？」

「必要ない。お前達が使え」

「……了解、警部補」

WA2000は短く返事を返し、先行するレオンの背中をおいかけた。死ぬんじゃないぞ、という先輩の呟きにたいし心配するなど手を振りながら。



「まさかガス管が破れてガス漏れとは……：けほつ。思慮が足りませんね。うっかり発砲したおかげで消し炭になるところでした」

熱気でチリチリになってしまった頭をふりながら、煤まみれのウエルロッドは独り言を漏らした。

当初の予定通りに地下通路を通ったはいいいものの、通路のガス管から漏れたガスが発砲の跳弾で生じた火花に引火し大爆発。巻き込まれてはいけないと最寄りの出口に駆け出したは良いものの、おかげで今までの道は火に包まれて使い物にならなくなったというわけだ。

「必死に逃げたおかげで道が思い出せません。ここは一体」

案内板に目を凝らしたところで、うげっ、と思わず声を漏らす。

「レイベンズ地区！ 病院とは真反対の場所じゃあないですか!? これでは目的地にたどり着くのはいつになることやら……」

ガツクリと肩を落としたところで、かすかに遠くから聞こえるうめき声に銃を構えるウエルロッド。いくら町外れとはいえ、ここが地獄であることには変わりはない。

奴らは、もうどこにでもいる。

「確かこの地区には教会がありましたね。頑丈な建物ですし誰か生存者がいるやもしれません。宗教は嫌いですが、生存者は助けないと」

建前とはいえ、まず警官としての義務は果たさねばならないと駆け出すウエルロッド。その影を、一台の監視カメラが追いかけていたことには気が付きもせずに。

「おや、空いているようですね。コレは幸か不幸か……」

周りにはゾンビの気配もしないので、早く入ってしまおうと走るウエルロッド。古臭い年代物の木の扉は空いていて、そこからは言い争うような声が漏れ出ていた。生存者の声だ！ そう確信して、自然に小走りが速くなる。

「ここは俺が見つけたんだ、良いからさっさと出て行け！」

「ケチくさいこと言わないでよ！」

「なんだとこのクソ女！」

「もういいやめるんだ！」

「……あのー」

「誰だ！」

「生存者です！」

扉の隙間から覗き込んだ先にはワイシャツ姿の男性が構えるリボルバーの銃口がピツタリと合わせられていた。反射的に手を挙げつつ、こつそりと室内に体を滑り込ませ扉を閉める。

「銃を下ろせ！ いいから、銃を、下ろせ！」

「…… チツ」

「……じゃあいつ死んでもおかしくないわね」

同じくハンドガンを構える男性がもううんざりだと大声を張り上げれば、渋々と銃を下ろし座席にどっかりと座り込む。

皮肉を漏らすタンクトップ姿の女性と、オリーブ色の防弾ベストを着た軍属だろう大柄な男性。そしてワイシャツ姿の男性と、白いパンツスーツを着たいかにもニユースキヤスターと言わんばかりの計4人。

ウエルロッドの姿を認めた軍装の男性が驚いたと言わんばかりに声を張り上げる。

「市警の制服じゃないか！ どこにいたんだ、仲間は!？」

「今日から配属だったのなんとも。ウエルロッドです、よろしく」

「こちらこそよろしく！ いやあ、同じ仲間がいれば百人力だ。俺はペイトンだ。こっちはジル」

「ジル・バレンタインよ」

「やつぱり！ どうりで見覚えがある顔だと思った。取材に行ったの覚えてない？」「どちら様?」

小さなビデオカメラを構えるスーツの女性が嬉しそうに声を上げて、ジルが困惑の声を漏らすのもお構いなしに捲し立てる。

「テリ・モラレスよ、覚えてない？ 事件で何度か取材したのをもう忘れたの？ ラクーン7の」

「あなたの出ているニュースは全部見たわよ」

「まさか私のファン？」

「今はお天気お姉さんでしょう？」

「で、そいつは一体何に使うつもりだ？」

そう言いながらタバコに火をつけ、皮肉っぽく返すジルに対しつまらないと言わんばかりの表情のテリ。彼女が構えるハンディタイプのビデオカメラを誇らしげに構えて胸を張る。

「エミー賞を取るための道具。無事に生還できたらの話だけねど」

「では生還できたらの賞金の1割譲ってくださいよ」

「守ってくれたらね。」

では、ラクーン警察はこのような事態をどのように捉えているのでしょうか？」

「これだからジャーナリストというのは……」

ジルに対しインタビュを開始するテリに対しこの非常時でも自分の職務を忘れないことは良いことだが、どうにも呆れ顔を隠せないウエルロッド。周りを得体の知れない生物に囲まれてしまっているのだから、多少なりとも危機感を持つてほしいところだ。

「それで、ここからどう脱出しますか？」

「脱出？」

「ええ。この街から脱出しないことには明日はありません。皆さん銃の残弾はどれほどでしょう」

「ワンマガジンが精一杯つてところね」

「中にあるやつで全部だ」

「口径は？」

「9mm。余ってるなら譲ってほしいけれど」

「32口径なんで使えません……ごめんなさい」

ジルとペイトンの言葉を聞きため息をつくしかないウエルロッド。その発射音の小ささと取り回しの良さで重宝してきた自分の愛銃ウエルロッド Mk IIを初めて恨んだ。9mm仕様の試作品にすればよかったと思うがもうどうにもならない話。

「で、そのリボルバー、残弾は幾つです？」

「なんだよ、聞いてりや勝手に仕切りやがって。大体なんでここから出なきやいけないんだ、安全なのに」

「危険を冒さないとニュースはゲットできないわ」

「お前には聞いてねえ！」

余裕がないのか、怒鳴るような口調で捲し立てる男性の言葉に対しウエルロッドは冷

静に答えを返す。

「物資が不足するからです」

「物資い？」

「食料、服、日用品、銃弾に武器。必要なもの全てが足りません。どこからか救援が来ると知って、それが1週間後だったらそれまでどう耐え忍べばいいんですか」

「なんとかなるだろ」

「なんとかなる前に死にます。いいですか、いつ救援もくるかわからない今、食料もないこの場所にとどまり続けるのは悪手です。早いところ移動するべきです！」

「これもまた神の試練だ。あるがままを受け入れよう」

教会の中に厳かな低い声が響く。全員が一斉に振り向くと、カソック服姿の老人が蠟燭の光に照らされて姿を表した。

「今頃教戒でも垂れるつもり？」

「それが私の使命だからだ。これは黙示録の始まりに過ぎない」

「やっぱり理解できない概念です。ともかく、入り口にバリケードを設置。生存者ようにひとつは残して全部封鎖します！ 作業には私とペイトンさんに、それと」

「ジャクソン」

「ジャクソンさんも手伝ってください。テリさんはカメラ回してて結構です」

「やった！」

「私は？」

「ジルさんは武器でもなんでも、使えるものを探してください。神父さん、教会内を案内してくれますね？」

「困っている人に手を差し伸べることこそ」

「そういうのは結構です！」